
キンモクセイ

煌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キンモクセイ

【Nコード】

N1342F

【作者名】

煌

【あらすじ】

秋の夕暮れ、帰り道。塀の向こうから香る、キンモクセイ。花言葉は本などにより異なりますが、なんとも初々しいキンモクセイの花言葉をヒントに書いたモノです。

『キンモクセイ』

雨が止んだ。

秋の涼しい朝。

キンモクセイの、ニオイがした。

君が言った言葉を思い出す。

A B型の君の言うコトは、かなり独特。

「キンモクセイの匂いってさ、花とは違うよね。

なんか…水にハチミツを入れるとぐにゃ〜って溶けるデシヨ？それに近い感じかな」

昨日の帰り道、知らない家の塀の上に咲いてたキンモクセイ。

何の事だろうと思ってた。

今ならそれが分かる気がする。

ヒンヤリとした空気に庭のキンモクセイの香りが溶ける。

―サヨナラを言った君の

―悲しげな笑顔が、

―僕の心に溶けてゆく…

無邪気に笑った君の口から
さよならを告げられたのはそのあと。

「知ってる？キンモクセイの花言葉ってね、『初恋』とか『真実』
なんだよ」

花言葉なんかに興味のない僕の胸に、その言葉は届かなかった。

でも、それは君からの言葉。

ハチミツみたいに君の初恋は溶けて、

いつか消えて無くなる。

僕は気付かなかった。

その時が二人の終わりだったのだと。

もしあの時に戻れるなら、

僕は君の悲しみに気づいてあげられる。

何度だって君を呼ぶ。

今ならハッキリと分かる。

君が必要としている事を。

—ごめん…—

―僕は君を、忘れない。

何度だって思い出すだろう。

あの香りが街に漂う頃に、
君と出会い、

そして別れたのだと。

いくつ年を重ね、

幸せを掴んだとしても、

忘れることはないと思う。

君は大切な事を教えてくれたから。

―さあ、

窓を開けて

今日も行こうか。

（後書き）

如何でしたでしょうか。 多分読みづらいモノだったと思います。
タイトル通り、秋に思いついた内容であの発言は私自身が勝手に
思っていることです《笑》 最後まで読んで下さって、ありがとうございます。
ございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1342f/>

キンモクセイ

2010年12月30日14時05分発行